万歳にあり丈ひらく戸口かな　三石
のとかさに老も気かるの門出哉　水哉
白梅や旭のむかふ地の高み　喜風
南気に流れの音や春の月　掬露
深山までもらぬは花の月日かな　道見
留主の戸を蝶の守りし日和哉　東石
かれ枝にすかりて咲ぬ藤の花　匠人
鍋炭の流れに浮くやなく蛙　一静
年積て松の位や若みとり　雲庵
欄干やなかれの底も月と梅　夢庵

甲寅春　鴎波書　印

⑯ 新年摺

藪川やうら戸〳〵のうめの花　蒼虬
眼つゝきに楓ひかへてはつさくら　卓池
若枝や白のひとへの梅のはな　得蕉
寒うても彼岸のうちや麦はたけ　一具
川口に綱やいかりやはるの月　梅室
向やうのまてむつかしきそはしめ　多代女
梅折て踏あらしけり雨後の庭　山雄
支度ほとつますにもとる若菜哉　五徳
思ふ図にうくひす来たり杖の先　笑楽
印籠のつま木にさはる二月かな　鳳毛
雉鳴や柴胡の雨のむらかわき　丁知
折ほかに思案もつかぬ野梅かな　氷狐
春の寒さ楽する人にさはりけり　与翠
松曳はあたりの人に見られけり　松什
きつとして山からさきへかすみけり　重羽
ほと近く成て見えけり梅の花　亭々
年札やつひに通らぬ道くたり　萬頃
欠るまてひと夜かすまむ月もなし　抱儀
門松やたてゝ見たれはちとひくき　壽堂
もそつとて逢るゝ人のかすみけり　素有
念入ていふや御慶の国なまり　楓關